

<日本レジャー・レクリエーション学会第43回学会大会

基調講演 於：東北福祉大学>

リ・クリエイター今、生きる力が試されているー

佐々木 豊志¹

RE-Create – ‘Zest for Living’ is Tested Now –

Toyoshi Sasaki¹

今紹介いただきました、くりこま高原自然学校の佐々木です。宮城県が一番北にある栗駒山の山麓で自然学校をしています。学会歴としては、この学会が一番古く、大学卒業後すぐ入会たので、もう三十数年になります。基調講演にお呼び頂きありがとうございます。

本日のタイトルは「リ・クリエイター」です。そして副題を「今こそ生力が試されている」としました。

私自身は野外教育や冒険教育を専門にずっと活動してきました。この分野でレジャー・レクリエーションが果たす役割はすごく大きいと考えています。それから「リ・クリエイター」です。被災地では復興や再生（＝リ・クリエイター）という言葉が次々出てきます。被災地では、リ・クリエイターとレクリエーションがつながる部分が大いと感じています。

私たちの活動拠点の1つは北上川です。子ども達が北上川を下ります。この川は、岩手県から宮城県に流れています。私の自然学校は、野外教育の中でも冒険的プログラムが多いので、山の中の活動だけではなく、長距離の川下りもします。北上川は全長250キロあります。そのうちの盛岡から太平洋までの約200キロを、子ども達が下っているのです。泊まってはテントを張り、下ってはテントを張り…と。

今お見せしているキャンプのスライドには「災害復興」と書いてありますが、2011年の3.11東日本大震災ではありません。実は、5年前の2008

年6月14日に岩手宮城内陸地震という大きな地震がありました。私の自然学校はそこで被災したのです。避難指示で急いで山を下りたので、山の道具は全部山に置きっ放しでした。「夏休みのキャンプはもうだめかな」、と思ったのですが、全国の繋がりある仲間が、テントからゴムボートまで全部貸すからやれと言ってくれ、被災2か月後にキャンプをやったのです。それをきっかけに、今日のテーマである「生きる力」、つまり子ども達に生きる力を育むプログラムをどうすればいいかについて、私自身もずっと考えていました。以上の経緯から、今日は「生きる力」に焦点を当ててお話したいと思います。

皆さんは「生きる力」という言葉を耳にしたことがあると思います。たぶん、はじめて公にしたのは1996年頃の文部省（当時）です。中央教育審議会の答申で出されたと思います。私が自然学校を始めた年が、ちょうどこの年でした。そのため自然学校のプログラムも「生きる力を育むために」と取り組んできました。この答申では「生きる力」を「いかに社会が変化しようと21世紀を目の前にして、20世紀の終わりに多様化した社会が変化するという中で、自ら課題を見つけて、自ら学んで考えて判断して行動し問題を解決する資質」と解説していました。自然学校はこれを受けて、生きる力をどうしたらいいのだろうと常に意識していました。

これを地震の時の人々の活動に置き換えると、当てはまるのですよ。地震によって社会が変化し

ました。そして被災地には色々な課題が発生します。課題に気づかないまま通り過ぎるのか、自分で課題を見つけてそれを受け止めて行動に起こすのかです。やはりここで生きる力を試されている気がします。

本日は、前半で私の取り組んでいる自然学校の理念のお話をして、後半は震災と絡めて考え方をお伝えできればと思います。

自然学校がある栗駒山の山腹は、国定公園ですので自然がとても豊かです。ブナの原生林がいっぱいあります。雪もいっぱい降ります。夏は高山植物がたくさんあり登山客が来ます。秋は紅葉がすごいです。昨日ちょうど寒波が入ったので、晩秋から初冬に切り替わったのが、はっきり見えました。風が強かったので、紅葉のオレンジ色、赤色が全部吹き飛んで落ちました。気温もぐっと下がりました。栗駒の多彩な四季の中で、子ども達と一緒に活動するのが自然学校です。夏休みキャンプ、冬休みの雪中キャンプ、冬山にも行きます。雪の中にも寝ます。ここ10年は幼少年期の自然体験が少ないと思い、「森のようちえん」という活動も行っています。森のようちえんの活動は全国的に広がり、今は年1回フォーラムがあります。今年も来週、神奈川県で第9回目の集まりがあり、600人申し込みがあると聞いています。

また、我々がやっている自然体験では、子ども向けのプログラムだけでなく指導者養成のプログラムにも取り組んでいます。私自身は教育が専門ですが、教育の他にもレジャー・レクリエーションなど、色々な形でプログラムを展開できます。子どもだけでなく、中高年や一般の人たちに対して山のガイドをし、自然の中での楽しみを提供することは、まさにレクリエーションです。豊かな時間を過ごして、リフレッシュして、元気に日常に戻るといふ自然体験の場をつくっています。

それから、自然学校は、不登校の子、引きこもりで社会とうまく関われない子の支援をしています。きっかけは、長期の自然体験キャンプでした。お母さんから「うちの子は学校に行けてないんだ。2週間のキャンプに参加すればそれをきっかけに立ち直ることができるのではないか」と言われたのです。最初は「参加しないかな」と思っ

ていたのですが来たのです。そして2週間キャンプをして、元気になって帰っていったのですよ。不登校になった理由は、同級生からのいじめでした。そのため同級生・同世代の子達にすごく不自信を持っていました。キャンプの子達は同世代です。しかし、不登校どうこうは関係なく、全国の子どもが集まって、2週間に渡り生活します。前半は、お互い知らないのでチーム作りをします。後半は、冒険的なプログラムなので、山に入り込んで5~6日山から出ずに、栗駒山を縦走して歩き回るプログラムでした。やはり引きこもっていたその子は体力がないのですね。一番最初にばてる訳ですよ。でも、最初にばててもキャンプの仲間が、仲間として受け入れて、弱かった彼女を助けて、何とか山を下りてきました。下山後に生還パーティーをして、振り返りの手紙を書かせたらですね、その子は「2度と栗駒山には登りたくない」とはっきり書いていました。「でも、この同じメンバーで挑戦しろと言われたらもう1回登れるかもしれない」とありました。仲間にも認められて、仲間にも励まされて、仲間と一緒にやりきったということに、今までにない感覚を得たようで、2学期から学校に通うと頑張っていたのです。私も気になり、連絡を取りました。最初の1~2週間は良かったのですが、3週間目くらいからちょっとおかしくなって、1か月でまた教室に行けなくなったそうです。でも、そのころにキャンプの仲間が手紙や電話をくれました。高校受験を控えていたので、学校には行ったのです。保健室登校です。ちゃんと勉強はして、テストも受けて、その後は立ち直って元気になりました。

この事実を目にして、不登校の子達が学校に1年中行けないのだったら、自然学校が1年中受け入れようと始めたのが、長期の寄宿です。まさに子どもが、リ・クリエイトといふか元気になって、もう1回チャレンジし、もう1回動き出すための支援を行っているのがくりこま高原自然学校の特徴だと思います。それから山村留学もあります。これは学校に行けない子ではなくて、都会の環境よりも自然環境のほうが、小さい時に生活するにはいいと親御さんも理解して、積極的に預けていただいて、地元の学校に通います。自然学校に寄宿して地元の中学校に通う山村留学もしていま

す。今まで10人くらい卒業させました。その後、子どもを対象に始めた寮に、大人が来るようになりました。20代、30代、1番上の年だと37～38歳の学校の先生が学校に行けなくなって来たケースもあります。今も社会人の方が来ています。20代ですね。少し自分のことを振り返って、もう一度目標を確認してもらい、頑張ってみようとエネルギーを補給する取り組みもしています。

そういうことで、私自身は非日常のキャンプ、野外教育から入ったのですけれども、こういう風に日常が入ってくることで途中から変わったのですね。はじめは「プログラム」を設定していたのですが、寮が始まると「暮らし」が入ってくるわけですよ。特に農的な暮らしに視点が行くのです。キャンプの時にはエネルギーを十分補給できるかで食事を考えますが、「暮らし」となるとアレルギーの子もいますし、変な添加物の入ったものを食べさせたくないと思います。そして、周りに土地はあるので畑を始めました。私もスタッフも農業は専門ではないのですが、たまたま私の父が定年退職で、山で小さな畑を子どものためにちょっとやろうと始めたんですね。専門ではないので、化学肥料や農薬の使い方が分からないので、結果的に完璧な有機農業です。完全な自然農法になってしまったのですね。農的な暮らしや自給をしながら、環境も気になり始め、食べ物も気になり始めました。こういう暮らしの中で家畜を飼い、今では馬まで飼っています。この様な暮らしをつくり日常をつくるということと、私が本来専門でやってきた冒険とで、日常と非日常の部分を両方を併せ持って活動してきたところです。

本来、レジャー・レクリエーションは非日常の部分がとても大きいと思います。ただ、私たちの大きな特徴は、生活・暮らしを創ってきたところにあると思います。建物も自分たちで作っているのですよ。自然学校をはじめて18年、廃材を材料に建物を建ててきました。左の建物は大工さんが建てました。日本環境教育フォーラムが宝くじ協会から助成金をもらったのです。このように、日常と非日常の世界、ケとハレの世界両方を織り交ぜながらやるのがいいと思います。両者を意識して織りなすのが大事です。都会から見ると農的な暮らしは非日常です。都会からくる人達は土い

じり、畑いじりを楽しんでいます。ところが、地元の農家の人は非常に疑問に思っていますね。なんでこんな草いじりを都会の人たちは喜んでやるの、と。農家の人たちは草むしりなんてしたくないんです。やっぱり同じことをやっても気持ちが悪くなるのかハレなのかで違うのです。

話が戻りますが、「生きる力」ですね。これを考えるにあたって私は“想像力”と“創造力”の2つが、大事だと思っています。イメージする部分とクリエイティブな部分ですね。

このことについてお話するに当たって、私は冒険教育が専門と言っているのですが、まず冒険からお話しします。冒険って聞いたときに、みなさんの頭の中にどのようなキーワードが挙がりますか。辞書には色々書いてあります。色々ありますが、こんな言葉が出てくるんですよ。「未知のこと、あらかじめ分かっていることは冒険ではない」です。知らない、リスクがある、安全ではない、危険を伴う、普段やっていないことが非日常です。予測が難しい、あるいは慣れてなく心理的に不安で、心臓をバクバク、ハラハラドキドキとさせるものです。それから、冒険は結果が保証されません。成功するかしないか分からない、もしかすると失敗するかもしれません。あらかじめ成功する、うまくできるのは冒険ではないのです。

冒険の逆を、冒険教育では「C(Comfortable)ゾーン」と言います。安全・安心、慣れている、知っている、これをCゾーンと言います。「Cゾーンから出るのが冒険」という定義です。また冒険で私自身が一番大事にしているのが自発的の行為です。冒険は人から頼まれてやるのではなく、自分からやるのです。先日、三浦雄一郎さんがエベレストに登ったのは冒険です。チャレンジですね、80歳を過ぎて。あれは誰にも頼まれていないと思います。三浦さん自身が登ると言ったんです。大切なのは自発的にCゾーンを出ることです。不登校、引きこもりの子達は実はCゾーンを出たくないとか、いつもCゾーンに居たいという気持ちなんです。ですから何とかCゾーンを出て、クリエイティブなことができるように支援をしているんです。先ほど森のようちえんの話をしました。3歳から5歳の子ども達は経験が少ないので、私たちに比べるとCゾーンが

小さいと言えます。たぶん子ども達は遊びの中でCゾーンを広げているのですよ。今日は木登りで一段目の枝まで登ったと。明日は二段目まで登れるかな、落ちるかもしれない、失敗するかもしれない。でも自分の意思で登って、少しずつ遊びの中でCゾーンを広げているのです。私自身は、成長とはCゾーンを広げることと捉えています。なので、私の自然体験や暮らしのプログラムでは、常にCゾーンを自分からちょっと超え、今までやったことの無い、体験していないことをやってみます。

私たちのもう1つのベースが、「体験学習」です。体験学習とは循環過程（ラーニングサイクル）です。簡単に説明すると、やりっぱなしではなくて、体験した後に振り返って、議論して分かち合うことです。特にうまくいかない時に活かされます。失敗したこと、上手くいかないことを、実際に振り返って何が起こったのか、どういう事実があったのかをあぶり出す、それからなぜそうなったのか分析してみる、そして今度上手くやるにはどうしたらいいか、新しい概念を見つけ出してもう1度チャレンジする。ぐるっと回ってはじめて最初の体験が活きます。私の自然学校はこれをベースに先ほどの自然体験と生活体験をやっていきます。

それから、あともう1つ説明しなければいけない言葉があります。自然学校に、「学校」という名前をつけています。よく、「普通の学校と佐々木さんの自然学校は何が違うのですか」と聞かれます。なかなかいい説明の言葉がなくてですね、どういう説明をしようか迷っていました。そして、あるビジネスの会で「あっこれは使えるな」というものに出会いました。野中郁次郎さんという一橋大学の名誉教授の言葉です。野中さんたちは「セキモデル」の中で、「知」には2種類あると言っています。1つは「形式知」です。文字や記号や図で表記できる知識です。マニュアルや教科書は形式知ですね。子ども達がテストで覚えなければいけないのは、まさに形式知です。もう1つが「暗黙知」です。言ってみれば形式知化できない知識ですね。文字とか記号とか図で表現できない、一人ひとりが持っていて、一人ひとりが概念化した力、腑に落としている知識です。職人技など個々に依存している知識です。元々は「形式知」は

存在しません。大昔は「暗黙知」だけなのです。なぜ形式知が必要になったかということ、共有するためです。社会が共有する、あるいは仲間と共有するために形式知が生まれ、文字や記号に落とし込んだのです。我々も日本語で形式知として抱えているものがたくさんあります。

暗黙知に関しては説明しにくい部分が多いのですが、例えば燃焼です。キャンプでよく火を使いますよね。火を燃やす。小学校4年か5年の教科書で燃焼の勉強があります。物は3つの要素があると燃えます。「燃えるもの」、「酸素」、「発火する熱」、の3つが揃うと燃焼が始まると答えに書けば100点です、学校では。ところが、3つを知っていても実際に火をいじれない子がいます。火が今どういう状態で、何が足りないのか、どうすれば火がしっかり燃えるのかを、目の前の現実としてやり取りできないのです。暗黙知は体験からでないとなかなか獲得できないと思います。形式知は概念学習という勉強の仕方です。先生が黒板の前に立って、教科書を開いて、今度テストに出すから覚えろよというのが形式知ですね。暗黙知は体験です。先ほどの例だと火をいじる。火をいじって、どういう状態か何回も見て、火と戯れて火と対話ができるようになった時に初めて、暗黙知が身につきます。昔はもっと学校も余裕があって、暗黙知を教えるチャンスがあったと思いますが、今学校は忙しすぎて形式知を中心に進めざるをえません。だから、子ども達は「覚える」ことを要求されます。覚えてテストの点数をたくさんとるといことです。自然学校は反対に体験を通して考える場面をたくさんつくります。どうやればちゃんと火が燃えるのかを考える。これが自然学校と普通の学校の大きな違いです。そんなことで、自然学校には「学校」がついていません。

震災後色々あって、自然学校を一般社団法人にしましたが、それ以前は私の個人事業、私が勝手にやっている屋号でした。ですから、公の教育機関ではありません。

3.11の記憶はみなさん新しいと思いますが、2008年6月14日に岩手・宮城内陸地震がありました。自然学校はその震源からすぐのところ。夏休み2か月前で、ニッコウキスゲが満開で見頃

のときでした。ちょうど土曜日で、これから観光客が来る朝8時43分でした。あと2時間くらい遅れていればもっと被害が多かったと思います。3.11は1,000年に1度の津波でしたけれども、5年前は3,000年に1度の大山崩れでした。自然学校は耕英地区という高原にあります。ここの山やダムが崩れたのです。約320m山が動いて、150mの崖が一気にできました。地震当日は天気が良かったです。

当時、ひとりのスタッフはダムの下に住んでいて、崩れた場所を10分前に通っていました。直後は震源がどこかわからず、自然学校には10人の寄宿生と10人のスタッフがいる状況でした。私もたまたまいました。揺れた瞬間は5～6人は大けがをしたかなと思う揺れでした。たまたま誰ひとり怪我がなかったんです。確認してから安否を親御さんに伝えました。後々新聞で見たら道がずたずたになって「孤立」って書かれていましたが、我々に孤立した感じはなかったです。「自立」した避難生活を始めたのです。上水道がだめでも山の水があります。キャンプ屋ですから明かりもあるし、バッテリーも発電機もあるので全然問題ない。食べ物も家畜がいますから、最悪は絞めて食べられます。野菜も取れ始めていました。そんな中、私たちは冷凍庫の中のものから食べ始めました。普段食べられない、隠してあるシカの肉やクマの肉を食っちゃえて。だからみんな明るいですよ、全然不安感が無いまま過ごしました。ただ、だんだん情報が入ってくると、駒の湯が吞まれて行方不明者がいて、ダムが崩れ、道が寸断されて孤立し、下りられないことを知りました。そして行政から連絡がありました。このままいても大変なので、自衛隊のヘリで2日後に下りましようと言われました。そのため、私とスタッフ3人を残し、16人を自衛隊のヘリで下ろしました。ところが翌日、私も下りることになったのです。避難指示で強制的に全戸下りることになったのです。理由もわからずしょうがなくです。暮らしはできるし、何も問題はなかったのです。

避難所では地域の人が肩を落としていました。なぜかというと、彼らにとって被災は冒険体験なんです。先が見えない、どうするの、いつ帰れるのという冒険なんです。私は結構元気にしてい

ました。もちろん私にとっても冒険でしたが、情報を入れて未知ではないところを増やしたのです。インターネットで情報が入っていたので、少し元気なんです。大丈夫だな、周りの人が応援してくれているという安心感がありました。

地域の人に、「インターネットを見ていると色々な支援をしてくれるから大丈夫」だと伝えました。例えば、私は着の身着のまま山から下りたため活動ができないわけですよ。そのため「車があればいいな」とインターネットに書き込みました。そうしたら翌日、5台の車が来ました。2台は自然学校で使わせてもらって、3台はおじいちゃんおばあちゃんたちの買い物や病院に行くのに使いました。うちのスタッフが運転手になって送迎しました。まあ、そんなことができたのは、冒険教育の考え方からです。要は、避難所がCゾーンです。おじいちゃんおばあちゃんはホッとしたと思います。自衛隊のご飯を食べてお風呂に入って、仲間がいるから安心したと思います。我々も避難所で自衛隊のご飯を食べて、寝て、ごろごろしても別に文句は言われなかったのですが、普段からCゾーンを出る様にしていたので、今何が出来るかをスタッフや子ども達と考えていたのです。それが後のボランティアセンターの立ち上げに繋がりました。

それからもう1つ、避難元の山間地、耕英地区は岩魚の養殖や苺の栽培をしています。ここの苺は6月の下旬から出荷するのですよ。高冷寒冷地なので、夏に苺が出来るのですね。苺はちょうど翌週から出荷するタイミングでした。苺農家さんは、出荷目の苺を残したまま降りちゃったのです。それから岩魚の養殖をしている人は、水の管理が出来ないまま降りて来たのです。だから、早く山に登って苺を採って、岩魚の管理をやろうと行政に色々働きかけました。ところが、危険なので行政は許可してくれません。そこで、インターネットに苺がこういう状態、岩魚もこうだと書き込みました。インターネットの向こうは、いつでもスタンバイして待ってますと言う方々がたくさんいました。でもなかなか行政が動いてくれません。苺農家さんに「苺採りに行きましようよ」と私が働きかけた時には、「また佐々木さん馬鹿なこと言ってる」って言われました。「どうやって

採りに行くの」と。「道も無いしヘリも使えない。そんなの不可能でしょう」と言っていたのです。でも冒険教育は、結果が保障されなくてもチャレンジするのですから、結果的に苺が1個も降ろせなくてもいいのです。チャレンジするプロセスが大事なのです。避難所で悶々とするだけじゃなく、アクションを起こして、色々な人に訴え、情報交換し、その中から新しい方法が見つかるかもしれません。こうしてCゾーンを出て苺採りに行こうという訴えが始まったのです。10日目に、一時帰宅用の90何席の自衛隊のヘリの席を確保したと行政から連絡が来ました。でも、地域の人だけでは90何席も埋まらなかったのです。30席ぐらい余ったのです。2、3時間行ってもやれることって高が知れているので余っちゃったんですね。でもその時です。ボランティアで自然学校がその30席全部貰うと手を挙げました。ボランティアを使って苺を採りに行ったらダメですと、行政は釘を刺してきました。でも、苺農家さんが手に持つぐらいだったらいいですよと肯定してくれました。もうみなさん分かりますよね、「苺農家さんだったらいい」と。だからボランティアさんは、その日1日苺農家さんとして登録して登ったのです。ボランティアさんを農地に運び、下ろしました。行政も苺を置いてけとは言わないので、400kgの苺を下ろして、ジャムにしたのです。ヘタ取りもボランティアです。ボランティアには、気仙沼の方もいました。彼らは3.11で被災しました。5年前私たちは海の人に助けられました。そのため3.11の時には、我々はすぐ動きました。

実は、2008年に地すべりを起こした所は、地質的にすごくおもしろいのです。私はここでよくカヌーをしていましたので、地質研究者と一緒に本来立ち入り禁止の所に入れたのです。まさに磐梯山が噴火して裏磐梯が堰き止められたのと同じ地形でした。湖が出来ていました。硫黄の臭いがし、青い水でした。それでここをジオパークにしようとして動き始めたのです。当時は行政に潰されましたが、栗原市は今ジオパークと言い始めてます。防潮堤の問題にも共通しますが、復興予算をどう使うのか、市民が望んでやるのかなどの議論が必

要だと思います。防潮堤はまさに居住地に近いので、議論は結構あると思います。守るのか、それとも自然をそのままにするのか、難しい選択です。一方、2008年の地すべりに関しては、何十キロ先にしか人が住んでいないので、なぜコンクリートで固めてしまったのか、私はまだ理由が納得できないでいます。

3.11は、まさに東北沿岸が全部津波で襲われた災害でした。私自身は、震災直後からすぐ動きました。私が自然学校を始める前年が阪神淡路大震災でしたが、震災2日後には私は仲間と東灘小学校に入っていました。その後能登の地震、ナホトカ号の重油事故、中越地震などがあり、5年前の地震で私自身が被災しました。その後3.11がありました。17～18年の間に7～8つの大きな災害に関わりました。私が動かざるを得なかったのは、Cゾーンから飛び出し、自分に出来ることあるからです。2008年の地震からの復興の半ばで、また3.11の地震が来たので、自然学校はまたクローズしました。2008年には、避難指示で2年間山に上がれなかったんです。2010年の秋に上がれました。そうはいっても雪の季節ですから、お客さんもあまり取れないし、まあいいやと冬越しをした矢先が3.11でした。再びクローズして、自然学校の仲間とやり取りしながら、3月11～12日は寄宿生の安否確認をし、13日から飛び出しました。そして登米市の体育館にボランティアセンターを立ち上げて、拠点を作りました。仙台から通うと時間がかかるので、拠点をここにしました。ここからだ、小泉地区に1日4往復できます。支援に集まった人達は、廃校になった体育館にテントを張って、20日から本格的に動き始めました。私は本部長として常勤で動きました。まさに先程お話しした「生きる力」です。私達のネットワークはアウトドアの連中、自然体験をたくさんしてきている連中です。自然体験活動するってことは、外界とやり取りを常にしているということなので、非常に動ける人達です。自発的にCゾーンを飛び出して被災地に来ます。被災地に行ったら自分が本当に役に立つのだろうかという結果は誰もわかりません。被災地がどんな場所なのか、誰がいて何が出来るのかは全然見えません。でも飛び出して来るのです。組織力じゃなくて一

一人の力で来たのです。ボランティアセンターは毎日が冒険体験学習です。飛び出して物を運ぶ、届ける、色々な所を回る。色々な問題があります。戻ってくると、夜ミーティングをします。毎日のミーティングが体験学習でした。被災地で色々な問題を抱えて持ってきて、なぜそうなってるのだ、何をすればいいんだ、じゃあ明日こうしましょうということの繰り返しですね。これを繰り返すことで被災地での動きがだんだんと見えてきました。そうやってシステムが出来てくるのです。より早く、よりスピーディーに、どういう風に被災地に届けるかという仕組みができてくるのです。こうやって現在の運送屋さんの仕組みができてきたのだと思いました。

被災直後は物資をとにかく与えようと支援しましたが、しばらくするとレクリエーションの底力を本当に感じました。実はですね、サッカーの岡田監督が環境活動家で、冒険教育を学んでるのです。サッカーのチームビルディングは、実は冒険教育の手法を使っているのです。そのため、彼は前から我々と仲間で、すぐに来ました。マイナス10度の体育館に一緒に寝て、一緒に食べて、サッカー教室をやりました。子ども達は避難所で運動できず、ストレスが溜まっていた。春休みに入ってちょうど3週間経った時に、彼はサッカー教室をやったんですよ。

岡田監督はサッカー教室からの依頼でも、6月以降にJリーガーを連れて被災地に来てます。ただ、その時の相手はサッカーチームに入っている子どもだけなのです。でも震災直後のサッカー教室は違います。このときは「サッカーやろう」という普通の幼稚園の女の子から中学生までが入り乱れていました。岡田監督もこれが1番楽しかったと言っています。私もレクリエーションの力っていうのはこれだなって思いました。子どもが頑張っている姿を見ると大人からも笑顔が出ます。レクリエーションには底力があるのです。被災地では4月いっぱい春休みでしたから2ヶ月学校に行けなかったんですよ。それなので、子ども達を遊ばせようと元気村を企画して、屋台村をやったり、遊びをしました。それから幼稚園と保育所も閉鎖されましたので、森のようちえん仲間

と、小さい子ども達を面倒みようと託児をやったんです。物資だけの支援ではなくて、こういう心の繋がり支援が被災地ではすごく大事でした。

一方、皆さんの耳に入っていると思いますが、大川小学校では108人の児童の内70人が亡くなって、いまだに4名が行方不明、先生も亡くなりました。ここにもすぐに行きました。大川小学校の1～2キロ上流に大川中学校があります。ここが我々の川下りの最後の野営地で、いつも校庭にテントを張らせてもらいお世話になっているのです。そこに泥が入ったのです。何とかしようとボランティアできれいにしました。そして、河北にもボランティアセンターをつくりました。そこには中学生の子やおじいちゃん達がお手伝いに来てくれたのですが、夜遅くなくても家に帰らないのです。なぜかというと、弟・妹を亡くしたのですよね。家に帰ると辛いのです。学生ボランティアもたくさんいたので、「だったら居場所を作ろう」と考えました。支援金が無くなった後も、アメリカの子どもケアするアメリカケアという団体からお金を頂いて、リオグランデという居場所を作りました。これは今も継続しています。そこでは山に雪遊びに行きます。子ども達がリ・クリエイト、元気になる為の方法です。

また伊里前小学校という高台があります。ここにも津波が来ていました。ここでは、子ども達が裸足で歩けるように細かいガラスを手で拾いました。手作業でしなければならぬことはいっぱいありました。いま被災地はきれいになりましたけど、本当におびただしい瓦礫があったということです。これが自然学校の仲間と動いた活動です。

この他には、先程お話ししたとおり5年前の地震で2年間山に上がれず、活動プログラムはいっさい出来なかったのが、里山に民家を借りて、再生しようと思いましたが、何かできないか考えましたが、事業として成立しないのですよね、売上げの見通しが立たないので、この年は補助金を取りに行きました。「地方の元気再生事業」という内閣府が出している100%の助成金があったんです。1/2助成だと、他に1/2原資がないと出来ないので、100%助成してくれる事業に手をあげました。里山が荒れてますので森林資源を活用する

プログラムが出来ないかなと考え、助成金を獲得しました。3年間で結構な額を頂く前提で始めたのですが、事業仕分けで1年で切れちゃいました。それでも取り組んだのは、森林資源をエネルギーに使うことで、ペレットストーブ、木質ペレットの普及プログラムを考えました。そのプログラムでできた組織が「日本の森バイオマスネットワーク」というNPOです。5年前の震災がきっかけで、森を守るNPOを作り、細々とペレットの普及をしたのです。その矢先の3.11の地震でした。今回は20,000人近くの方が犠牲になっています。92%は津波で溺死しましたが、8%は助かっているのですよ。1,200人ぐらいが津波から助かっています。何とか難を逃れて、びしょぬれになって助かったけれども、着替えが無い、それから避難所に暖房が無いのです。3.11直後に寒波が来て、雪になりました。その寒さで亡くなった方がいます。うちのNPOが出来ることはペレットストーブを設置して歩くことです。すぐ全国の会員に連絡をして、いらぬのを送って頂きました。43台届いて、それを設置して歩きました。十分ではなかったですが、出来る範囲がこれでした。

また5年前の震災の時にうちのスタッフが仮設住宅に入っていました。仮設住宅の住環境は良くないです。冬は結露します。夏は暑く、音は筒抜けで、本当に良くありません。でも5年前の被災時にはスタッフに「しょうがないな、我慢するしかないな」と話していました。しかし3.11のニュースを聞いたら、10万棟の仮設住宅が必要とされていました。そこで1棟でも多く、住環境の良い仮設住宅が出来ないかかと思いました。バイオマスネットワークで繋がった仲間に製材所や工務店、ペレットストーブをやっている連中がいたので、彼らのネットワークで家を建てようと思いました。地元の木や地元の大工さんを使って、仮設住宅を作ろうという提案を持って南三陸町に行ったんです。3月29日でした。結論は、門前払いでした。仮設住宅は法律で縛りがあって、建てられる能力があっても我々は参入できない仕組みです。日本プレハブ建築協会の会員でないと建てられないのですね、プレハブメーカーや住宅メーカーです。お金は東京に流れる仕組みになってい

ました。でも、一棟でも多く建てたいという気持ちがあったので、国からお金をもらわなくても、民間で支援金を集めて建てられるだろうとアクションを起こしたのです。結果が分からないけど、Cゾーンをまた飛び出したんです。賛同者がたくさん出ました。それが「手のひらに太陽の家」という施設です。避難所生活はだいたい3~5ヶ月で、その後仮設住宅、復興住宅、高台移転、新しい街づくりと進みます。仮設住宅の生活は、通常約2年ですが、今回はもっとかかると思います。仮設住宅には抽選で入りますので、コミュニティはバラバラになります。私たちは、コミュニティが壊されないように考えました。ただ、建築がずっと遅れてしまったので、今は福島の子も達を受け入れてます。建物自体はエネルギー自立で、復興すべき将来を提案する建物です。地元の大工さんが全部宮城県産材を使って建てました。提案は低炭素・環境循環型です。エネルギーは再生可能なエネルギーを使う取り組みです。今、福島の子も達は外で遊ばせません。全く外で遊ばせません。土もいじれない、落ち葉も触れません。その子達を受け入れて、存分に遊ばせます。そのため本当にリ・クリエイティブになります。レクリエーションです。子供たちは元気になって、ストレスを全部抜いて存分に遊んで帰ってもらってます。子ども達の為にと考えて始めたのですが、親御さんにもいい施設です。福島親御さんは悩みを抱えています。言えないことを心に抱えています。でも、うちのスタッフは、夜2時、3時まで話を聞くし、ここで出会った親御さん達が同じ悩み、課題を共有できて、仲間ができて、元気になって福島に戻ります。

それから、今回の話からは、ややずれるかもしれないですが、国連WFP (World Food Programme) の大きいテントを、我々は岩手県と宮城県に30張建てました。WFPと関わった時に組織力と人間力がすごいと思いました。混沌としてる中では、個々の力がすごく大事だと思います。でも、もっともっと大きな力を発揮するには組織が動くべきです。WFPは発展途上国の条件の悪い所にテント張って、食料を確保する支援活動をしています。今回テントが成田に着いて、福島を超えて宮城・岩手に持ってくるにあたって、国連のWFP本部

は、福島原発の直径 100km 以内は通過するなど言っていました。100km 以内を通らずに宮城・岩手に行くには、新潟をぐるって回ってこないといけないのですよ。でも、そんな時間はないのですね。彼らはまっすぐ国道 4 号線を突っ切るんです。放射線の測定機械をつけながら、毎日本部に報告してるんですが、その時だけスイッチを切っています。現地の個々の情報が有力で、個々の判断に預けています。そして、大きな組織として動かなければならない時には組織として動くのです。組織力と人間力とのあり方を、すごく考えさせられました。我々はこの仮設テントで商店街を作ったり、いろんな活用をしました。行政よりもたぶん動きが早かったと思います。

時間が近づいていますが、私自身はレジャー・レクリエーションならではの体験や、実際にやるのが 1 番大事だと思うんですよね。机の上だけではなく、本の中だけではなく、実際にやるとが大事です。体験学習で得るものは、とても大きいのです。実際にやって何を育むのかを具体的に説明することは難しいです。

その点で、『バカの壁』という養老孟司さんの本は説明に使えるなと思いました。皆さんの中にも『バカの壁』を読んだことがある方もいると思います。5～6 年前のベストセラーです。その中に「脳内一次方程式」という言葉が出てきます。この本では、薬学部の学生さんに出産のビデオを見せて、その後に感想を聞いたら、女子学生がすごくタメになりましたという反応に対して、男子学生は淡々としていたと書いてあります。同じ物を見せているのに、なぜ反応が違うのかを説明しています。どういうことかという、「X=インプット」をする、ここでいうとビデオを見せた。「Y=アウトプット」、反応ですね。男子学生と女子学生で違うと、同じビデオを見せたのに Y が違うということです。だったらそこに「A=係数」があるだろうっていう言い方です。この「A=係数」のことを「感情の係数」、「現実の重み」と言っていました。女子学生にとってみれば出産っていうのは、いずれ自分にかかってくることです。男子学生にとってみれば、他人事なんですよ、そこに違いがあります。この「A=係数」によってア

ウトプットの態度が違うということなので、この「A=係数」というのはすごく大事にとらえなければいけません。私なりに解釈すると、「Y=アウトプット」は「行動」ですね。そして「X=インプット」は、先程お話しした概念学習で得られる「形式知」です。知識も大事です。覚えることは大事なのです。それを A という感性、つまり心の係数・感じる心と力があって初めて、Y という値が出るのです。不登校、引きこもりの子達、うちに来ている子ども達は、この A の係数が 0 に近いんですよ。全く 0 になった場合、X に何突っ込んでも Y は 0 ですよ。だから、何を与えても無反応、無関心、無気力になります。だから、この A を育むということが大事なんだなと思います。体験を通して育むということは、たぶんこの A の部分を育てているのだらうと思うのです。レジャー・レクリエーションの世界では、この A をどう育むかが非常に大きなポイントになると思うのです。一人一人が何に意欲があり、何に関心があって、何を心の源にしているかを育むのです。レジャー・レクリエーションはそこに 1 番力が発揮できると思うのです。文部科学省的には、「心の教育」で A を育むことを試みたが、学力が低下したので、X によりが戻ってきて、やっぱり学力をつけないといけないと言ってますね。A なのか X なのかっていう二者択一の話をしているようですが、そうではないのです。A も大事だし X も大事。両方あって、どうなるかです。

A が 0 だとさっき言ったように Y も 0 ですよ。一方で、A が無限大になると、これを養老孟司さんは「原理主義」と言っていました。要するに、例えば A の源が危険な教祖だと、X に何を突っ込んでもカルト集団になるんですよ。だからちゃんと A っていう部分を育むことが大事だと私自身も感じます。養老孟司さんが言った『バカの壁』とは、この壁なんですね。暗黙知・形式知、右脳・左脳がありますね。ここに壁があると色々な不具合が出るのです。

これを聞いた時に思い出したのは、自然学校を始める前に 15 年間やっていた東京でのサラリーマン生活です。夜会議が遅くなって弁当を買いに、近くファーストフードに行く訳ですよ。「何とかバーガー 20 個、何とかドリンク 30 個、何とか

ポテト 20 個」と注文します。そうするとカウンターのお姉さんが「お召し上がりですか？」と聞くのです。「お持ち帰りですか？お召し上がりですか？」と。これは少しおかしいですね。いくら食いしん坊に見えても私がここで 30 個のハンバーガーを食べるのかと。でも間違いじゃないんですよ。マニュアルどおり言わなきゃいけないのです。その子にはバカの壁があったのです。現実と知識をちゃんと使い分ける、上手く融合して使うべきです。こういうケースが被災地では、いっぱい出ました。特に行政はマニュアルが無いと動けないのです。逆に私なんかは、感覚的に動き過去のデータを無視して動いたりするので、失敗する時もあるのです。だから、どっちがいいという訳ではないんです。両方やっぱり上手く取り込まないといけないということです。その為にさっきの A っていう感情の係数をちゃんと育む必要があるのです。たくさん経験をして、たくさん内側

から湧き上がる「何だろう？」というエネルギーを育みながらも、知識が必要なのかなという風に感じました。

本日は、被災地でのリ・クリエイトする取り組みを私から一方的に話しました。私は、野外教育、冒険教育、レジャー・レクリエーションを専門にやってきました。でも我々が取り組んでいるのは、暮らしとか生活とか産業に直結しないと意味が無いと思っています。やっぱり、リフレッシュして頑張るぞと思い、その頑張る先が暮らし、生活、仕事っていう所に直結しないとダメだと感じます。

今回の学会の話も、どこかに繋がって行って、その先にある何かに届くと信じてますので、今後ともレジャー・レクリエーション学会の役割を皆さんと共に、私も会員の 1 人なので、共に歩めたらと思います。

ご清聴ありがとうございました。